



神奈川大学旧図書館

神奈川大学「図書館だより」創刊 40 周年記念号

目次

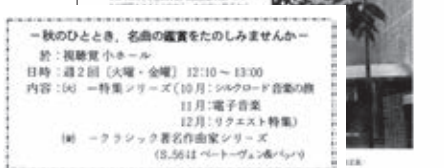
■ 神奈川大学「図書館だより」創刊 40 周年を迎えて	・・・ 2 頁
■ 神奈川大学「図書館だより」に寄せて / 諸田 實	・・・ 4 頁
■ 図書館のありがたさ / 西 和夫	・・・ 5 頁
■ 1983 年のレコードコンサート	・・・ 6 頁
■ わが図書館の 20 年 / 大久保 久雄	・・・ 7 頁
■ 《図書館の所蔵資料紹介》 神奈川大学「図書館だより」－図書館員による貴重資料紹介－	・・・ 8 頁
■ コラムニストの憂鬱 / 原田 広	・・・ 9 頁
■ 今号の表紙 編集後記	・・・ 10 頁

図書館だよりと図書館の40年

ガリ版刷りのB4版で始まった「図書館だより」は、1975年6月号からB5版二色刷りの印刷物になりました。B5版第1号からは6～8頁構成、内容は先生方や職員による執筆、所蔵資料の紹介、利用法紹介などから成り、現在の図書館だよりも基本的にこの第1号のスタイルを踏襲しています。(下の写真は印刷版図書館だよりの第1号と第2号)

□ 1973年－1980年

この時代の図書館は現在の6号館にあり、今の図書館はまだ建てられていませんでした。旧図書館では全館閉架式で、利用者が直接書架を眺めることができなかつたためか、かなりの誌面を割いて図書のリストを掲載し、所蔵資料の紹介をしています。1979年第2号(通巻20号)からは連載「新図書館建設」が開始され、新図書館(現在の図書館)開館への期待を高めています。また、図書館職員が貴重書を紹介する連載が開始されています。



新図書館落成記念特集号と視聴覚小ホールのレコードコンサートの記事

□ 1980年－1990年

新図書館が開館したのは1980年11月4日でした。開館当時の学生の執筆記事によれば「狭隘で騒然としていた旧図書館に比べ新図書館は、静境で落ち着いた印象」とあります。視聴覚小ホールなどの新しい施設ができたことで催し物などの活動も活発になり、誌面からは新図書館で働く職員、学生や教員の喜びが感じられます。

□ 1990年－2000年、現在まで

90年代に入ると図書館業務電算化の記事が掲載されるようになります。現在ではごくあたりまえの検索システムや蔵書管理、貸出のコンピュータ化はこの頃から始まりました。90年以降の図書館だよりは、取り扱う題材も多様化し、様々な試みがみられます。91年からは各号ごとに〈病の諸相〉〈技術と環境〉といった一つのテーマを決め、テーマに沿った執筆や資料の紹介を行ったり、97年から2000年まで一時的にデザインを変えたりとバラエティに富んだ図書館だよりが作られました。また、2000年になると電子資料に関する事項を取り扱う「e(イー)通信」が図書館だよりから分かれて発行されました。(e通信発行は2009年まで)



1997年-2000年の図書館だよりのデザイン

紙媒体の新聞や雑誌が廃止されることの多い現代、「図書館だより」はこれからも図書館と共に歩み続けます。

神奈川大学「図書館だより」に寄せて

諸 田 實

本学へ赴任したのは1965（昭和40）年4月、外国語学部が新設され、法経学部が法学部と経済学部に分離、独立し、工学部に建築学科が増設された年である。

図書館はいま「メディア教育・情報システムセンター」が入っている6号館で、3階と4階には教員の研究室が並び、地下の書庫へ降りる階段は狭くて急な鉄梯子のようだった。翌年、大学院開設のために30代の若手4人が図書の選定を命じられた時には、図書館の島田部長といっしょに5人で丸善、紀伊国屋、雄松堂と回り、倉庫に入れてもらって予算の許す限りバックナンバーを集めた。

1980（昭和55）年に新しい図書館ができた時には、古いアパートから豪華な高級マンションへ移ったような感じだった。松村部長を中心に図書館が総力をあげて作った所蔵貴重図書目録『古典逍遙』が私立大学図書館協会の賞を受けた時には、鶴見大学での授賞式に館長として出席した。「図書館だより」はその間の1973（昭和48）年に発行され、私も2度書かせてもらった。すべて遠い昔の懐かしい思い出である。

昔話はそれまでにして——私はいままで本を読む達人からいろいろと本の読み方を学んできた。

小説『冬の鷹』（吉村昭）のなかに、蘭学を勉強するために長崎へ出てきた前野良沢に、通詞が蘭学に通じた上役の伝言を伝える場面がある。「それからこうも申しておられた。長崎では、ただ驚かれるだけで十分である。大いに驚かれるがよい。勉学は江戸におもどりになってからするべきだ……と」。

勉強にはまず驚くことが大事だ、なぜ、どうしてこんなことが、と驚いてそれについて本を読めば勉強が身につく、というのであろう。「驚嘆する能力がその事柄の意味を問うことを可能にする前提条件だ」と言った外国の学者もいる。何かに驚かないと、何を読み何を勉強したらよいか分からないのではないだろうか。何かに驚くためには、心のアンテナを張って大事な電波をキャッチすることだと思う。

もう1つ、経済学者のハロッドが、学生時代にジョン・ロックの『人間悟性論』を勉強していた時のことを書いている。「1時間のうちの15分間は原文を読み、残りの45分間を読んだことについて考える」のにあてたと（『社会科学とは何か』）。15分間読んだら、それについて45分間考えて理解を深めろ、読みっぱなしではすぐ忘れてしまうぞ、というのである。

ロックのようなむずかしい哲学書ばかりを読むわけではないから、3倍にこだわることはないかもしれないが、読んだことについて友達と喋ったり、ノートにまとめてみたり、繰り返し読んだりすることは必要であろう。私は机の前に座るより、静かな道を歩きながら考えを整理したり文章を練ったりする方が好きなので、このハロッドの言葉は忘れられない。

最後に、昨年のことだが、友人から送られた論文を読んでいて、「凡庸な教師はただ喋る」から始まり、「偉大な教師は心に火を点（とも）す」で終わる4行の格言に目がとまった。作者はWilliam Arthur Ward、「心に火を点す」の原語は“inspire”だという。

凡庸な教師だった者がこんなことを書くのは気が引けるが、教師を書物に置き換えて読んだらどうだろうか。文字を連ねただけの退屈な本もあれば、読者を元気にし、読者の心に火を点してくれる本もあるのではないか。火を点す心のランプは若い時のほうが強く火がついて、いつまでも消えないようである。

皆さんが図書館を利用して、心の火を点してくれるような本に出会うことを願っている。



旧図書館の閲覧席

元神奈川大学経済学部教授
1986年4月～1988年3月 図書館長就任

図書館のありがたさ

西 和 夫

横浜市本牧に三溪園という庭園がある。三溪と号した原富太郎の自邸と庭を明治 39 年（1906）に開放し、以後ほぼ 1 世紀、市民の憩いの場として親しまれてきた。庭には三溪が集めた優れた建物がああり、まるで建築博物館のようだとされている。

たとえば臨春閣。数寄屋風書院の優美な建築で、池に臨んで建ち、緑の丘を背景に見事な姿を見せる。あるいは聴秋閣。規模の小さな建物だが、非対称の変化に富む外観と複雑な間取りの内部は、奇想の建築と呼ぶにふさわしい。このほか寺院の本堂や三重塔、茶室や民家などが庭のあちこちにちりばめられている。

建物の多くはこの地で建てられたのではなく、鎌倉、京都、大阪、岐阜などから移築された。移築前はかなり傷んでいて、崩壊寸前だったものが多い。傷んではいても価値の高いことを三溪が見抜き、横浜へ運んで生き返らせた。

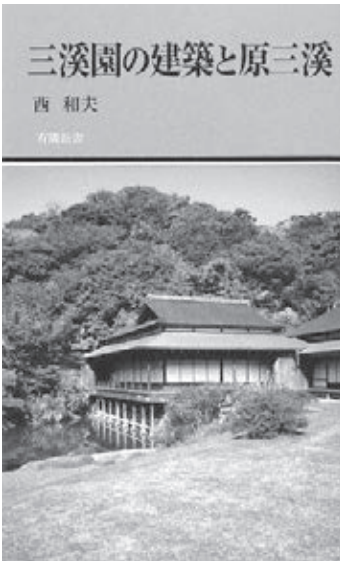
ところで臨春閣だが、三溪は豊臣秀吉ゆかりの建物だと思っていた。手紙に「桃山御殿」と彼は書いている。第二次大戦の空襲で三溪園も大きな被害を受け、その修復が昭和 30～35 年に行われた。そのとき臨春閣は秀吉とは何の関係もなく、紀州（和歌山）藩主の別荘巖出御殿^{いわで くてん}で、これが大阪の春日^{かす}出新田（現在の大阪市此花区）に会所（新田管理の建物）として移され、さらに三溪が横浜へ移したとの説が出された。以後これが定説となる。

しかし私は、その後の美術史分野の研究や会所建物の研究を総合させて、巖出御殿ではなく、会所の建物そのものだと考えるに至った。

巖出御殿は紀の川の岸に建っていた。だから今、三溪園でも池に面して建っているのだと説明されると、なるほどと思ってしまう。しかしこれは誤解である。臨春閣の前の池を掘ったのは三溪である。彼は巖出御殿説を知らない。その説が出されたときすでに没していた。大阪の会所が池に面していたから池を掘っただけである。

さて、以上は話の前置き、落語で言う「枕」である。言いたいのはその先だ。三溪園の建物の以上のような検討を行い、昨年（2012 年）『三溪園の建築と原三溪』と題してまとめ、上梓した（有隣新書）。

この本をどうやって書いたか。執筆を始めて数ヶ月、本学図書館にもぐり込んで資料を集め、じっくり検討した。この一冊を生み出してくれたのは、そう、わが図書館なのである。大阪の新田のこと、紀州の藩主や和歌山のこと、ひとつ新しいことがわかるとそれがヒントになって別なことがわかる。県史、市史、建築修理工事報告書、あるいは各地の地図。色々とそろっている。わが図書館が豊かな資料の一杯詰まった宝庫であることを今さらながら強く認識し、感謝しているところである。



西 和夫『三溪園の建築と原三溪』
請求記号：B 081-72-23（横浜図書館）

元神奈川大学工学部教授

1992 年 4 月～1994 年 3 月

2000 年 4 月～2002 年 3 月 図書館長就任

1983年のレコードコンサート

1980年に落成した現在の図書館には、それまでの旧図書館にはなかった視聴覚資料室が設置された。マイクロ閲覧室、資料庫、リスニングルーム、視聴覚小ホールなどから成る視聴覚資料室の開室は、新図書館開館から5ヶ月後の1981年4月で、小ホールでは音楽鑑賞やビデオ鑑賞など図書館独自の企画が行われた。1981年10月号の「図書館だより」には、初めてレコードコンサートのお知らせが掲載された。

レコードコンサートとは昼休みの一時間、視聴覚小ホールの椅子に座り、スピーカーから流れるレコード盤の音色を楽しむという催しものである。この時代は高級なオーディオ機器で音楽を鑑賞することへの憧れがあった時代で、当時の「図書館だより」には毎回40名以上の参加者で盛況だったと書かれている。小ホールに設置されていたオーディオ機器についての問い合わせも多く「図書館だより」1982年1月号にはリクエストに答えて使用機器名が掲載されている。

レコード・コンサート		視聴覚資料室	
日時：(火曜・金曜) 12:10~13:00		於：視聴覚ホール	
4月のプログラム			
④ 新入生歓迎特集 12日 喜多郎 シルクロード組曲1 ロンドン交響楽団 19日 シルクロード組曲2 26日 ザ・ビートルズ「Abbey Road」		⑤ 新入生歓迎特集 15日 ドヴォルザーク 交響曲 第9番 「新世界より」ノイマン(C)チェコ・フィル 22日 ヴィヴァルディ 協奏曲「四季」 イ・ムジチ合奏団	
5月のプログラム			
④ スウィング・ジャズ特集 10日 「The Swing」 グレン・ミラー他 17日 「Operation Benny Goodman」 シャープス&フラップ 24日 「It Might as well be Swing」 シナトラ&ベイシー 31日 「Lionel Hampton」 オールスター・ビッグ・バンド		⑤ シューベルト特集 6日 「さすらい人」幻想曲 ボリーニ (pf) 13日 弦楽四重奏曲 第14番 短調 「死と少女」ジュリアードSQ 20日 ピアノ五重奏曲 イ長調「ます」 ギレリス (pf) アマデウスSQ 27日 交響曲 第8番 短調「未完成」 ベーム (C) ベルリン・フィル	
6月のプログラム			
④ 懐かしのアメリカン・ポップス特集 7日 アメリカン・ヒット・パレード 1963-1972 14日 サイモン&ガーファンクル セントラルパーク・コンサート1 21日 セントラルパーク・コンサート2 28日 ザ・ブラザーズ・フォー グリーンズリーヴス		⑤ ブラームス特集 3日 ピアノ五重奏曲 へ短調 Op.34 エッセンバッハ (pf) アマデウス SQ 10日 ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77 クレメール (vn) カラヤン (C) 17日 ピアノ協奏曲 第2番 Op.83 ギレリス (pf) ヨッフム (C) 24日 交響曲 第4番 短調 Op.98 ショルティ (C) シカゴ交響楽団	

上の記事は1983年4月号「図書館だより」のレコードコンサートのお知らせである。4月は「新入生歓迎特集」として当時大ブームだったNHKスペシャル「シルクロード」の音楽、シンセサイザー奏者喜多郎の特集を始めとして、クラシックの名曲「新世界より」「四季」、ビートルズの名盤「アビーロード」が並ぶ。5月にはスウィング・ジャズや「ます」など心浮き立つような曲、6月にはライブアルバムの名盤サイモン&ガーファンクルの「セントラルパーク・コンサート」やブラームスの特集が行われている。当時の学生達が小ホールに集まり、人気の曲やスタンダードナンバーのレコードに耳を傾け音楽を楽しんでいる様子が目に浮かぶ。

レコードコンサートの開始時間が近づくと、担当者はスピーカーの向きを調整し、演奏開始時には手元に意識を集中させレコードの溝に針を落とした。演奏中は振動で針が飛ばないように静かにしていた。時には音楽に聴き入ってすっかり心地が良くなりA面が終わったのに気付かず、参加者に合図されてあわててB面にひっくり返した事もあった。演奏が終わって参加者が帰るとホールの照明を落とし、レコード盤の表面をフェルトで拭き、円形のスリーブに入れ紙のジャケットにしまい、資料庫に戻した。この文章の意味がわかる人もそのうちいなくなるのだろう。

1983年の「図書館だより」に掲載されたレコードコンサートのお知らせ。当時はお知らせに過ぎなかったその記事。それはかつて、図書館の小さなホールに学生達が集まり、レコード盤から流れるひとつの音楽に耳を傾けた時代があったことを、今では物語っている。

わが図書館の20年

大久保 久 雄

「図書館だより」が創刊されて40年、記念しての一文をとということで創刊号のコピーと最近の号数が手許に届いた。拝見したがB5判8頁2色刷のレイアウトも見事な冊子である。内容も自館の利用案内、所蔵資料に丁寧な解説を付しての紹介、さらに他館の紹介まで広げての記事は図書館広報誌として申し分ないものである。連載コラムの“本の歴史を変えた人々”(138号)などは他誌に例をみない書誌学的記事である。是非、学生は本誌を読んで見識を広めてもらいたいものである。一方、わたくしの関わった「図書館だより」第1号は、B4判タイプ印刷の1ページものであった。館長に若いときの図書館利用の体験談を書いてもらったが、あとは学生の入館から退館までを図で示したり、購入希望の図書リストをのせたり、学生の利用案内として工夫はしているが掲載記事が少ない。図書整理の仕事が多忙で合間に編集製作した思いがある。恥ずかしい次第である。大学の発展とともに成長した「図書館だより」を誇りに思うとともに更なる発展を祈念したい。「図書館だより」のバックナンバーについての記憶は少ないので創刊号だけの感想にとどめ、以下、私事を含む話になって恐縮だが、携わった昔の仕事について申しのべたい。神大図書館への奉職は丁度いまより半世紀前、昭和38年のことである。それまでの図書館が狭隘になったため作られた神大2つ目の図書館で、いまの6号館である。学部の増設や学生の増加に合わせてできた鉄筋4階の新館で、1階が書庫、2階が閲覧室と事務室、3・4階が教員研究室であった。教員は研究室からそのまま書庫へ入れたので先生方の図書館利用は多かった。当時は夜間部学生のために夜9時まで開館していたので、館員は7、8人だったが全員交代でつとめた。図書館の利用法は閉架貸出方式で閉架で自由に読める資料は、新聞と新刊の雑誌だけだった。学生は2階閲覧室前のカードボックスから読みたい本をさがし出し閲覧票に記入、カウンターへ請求しなければならなかった。フロアには、分類、著者名、書名、参照などの目録カードボックスが数10台あった。カード枚数は1冊の本に対して5枚から10枚くらい作ったので、当時、蔵書数が10万冊とすれば7、80万枚のカードが納まっていたはずである。このカードは自館で印刷作製、利用者の少ない朝のうちに職員全員でカードボックスへ納めた。カウンター業務も職員交代でつとめたが、本の貸出しだけでなく返却本を本棚へ収納する仕事もあり多忙だった。カウンター応待でいまでも覚えているカード利用の仕組みについて考えさせられたことがある出来事を紹介したい。ある新入生が、カウンターへきて「きんいろよまた」という本がありますかと問われた。一寸考えて「金色夜叉」のことだとわかって、書庫から「現代日本文学全集」中の「尾崎紅葉集」をとり出して提供し、よみ方やカードの検索法を教えてあげたことはいまでもない。誤読は別として当時「こんじきやしゃ」という書名カードは入っていなかったのである。元版(明治31年春陽堂刊)を所蔵していなかったのと全集本中の分書名カードをとっていなかったからである。いまの神大は120万冊の本を所蔵するが、OPAC検索によって希望図書を寸時に発見できるという。目録情報のデジタル化が進んだのは平成3年、わたくしが退職したあとのことである。以上とりとめなく紙のカードの時代の図書館をなつかしく回想させていただいた。御礼申し上げます。



—当時の図書館利用—

元神奈川大学図書館資料課長
1963年4月～1991年3月 図書館在職

図書館の所蔵資料紹介

神奈川大学「図書館だより」
－ 図書館員による貴重資料紹介－

(請求記号 PB 010-24)

所蔵資料の解説文を書くという事は一冊の本にじっくりと向き合うことであり、それは図書館員にとってはこの上ない喜びとなります。しかし、その本について調べ、新たに得た知識を制限された字数で読み手に伝わるように書き記す事は苦勞を伴う作業でもあります。「図書館だより」誌上では、1973年の創刊号から現在に至るまで幾度かの中絶はあったものの、図書館員による様々な所蔵資料の紹介が40年間続けられてきました。その中でも特筆すべきなのは1979年5月号から38回にわたって続けられた貴重資料の紹介です。

下のリストは紹介された貴重資料の一覧です。八百字から一千字程度の文字数で解説を行うこの連載は1979年5月号の『42行聖書（レプリカ版）』で始まりまし。以降、本学の貴重書コレクションからデイドロ・ダランベールの『百科全書』、「山口文庫」を核とした近代思想と経済のコレクションから18世紀ルソー、マルサスなどの著作、パリ・コミュニケーション関連からは『シャルル・ロンゲの書簡』、日本研究コレクションからシーボルトの『日本』などが取り上げられています。また、和漢書からは朱子学の『四書集註』『舜水先生文集』などがとりあげられ、いずれも著者とその作品に関連する時代背景や、その著作が後の社会にもたらした影響などが詳しく解説されています。

1979年5月	第19号	『42行聖書』 世界最初の金属活字本
1979年7月	第20号	経済学上最大の古典『國富論』
1979年11月	第21号	デーヴィッド・ヒューム『哲学論稿』
1980年1月	第22号	『ルソー論集』
1980年5月	第23号	『精神論』
1980年7月	第24号	『社会の体系』
1980年11月	第25号	『百科全書・体系百科全書』フランス啓蒙時代の二大百科
1981年1月	第26号	『日本王国図』 L'empire du Japon
1981年4月	第27号	『中国語-フランス語-ラテン語辞典』
1981年7月	第28号	ミラボー侯爵『租税論』
1981年10月	第29号	『舜水先生文集』
1982年1月	第30号	『網齋先生文集』
1982年4月	第31号	マルサス『人口論』
1982年7月	第32号	サヴァリー『完全な商人』全2巻
1982年10月	第33号	実用書の祖：パチョリ『スムマ』・『簿記論』
1983年1月	第34号	ベンサム『高利の擁護』
1983年4月	第35号	J. J. ルソー『エミール、又は教育について』
1983年7月	第36号	P. J. プルードン『一革命家の告白、二月革命史のために』
1983年10月	第37号	J. S. ミル『自由論』
1984年1月	第38号	ツェドラー『科学・学芸万有百科事典』
1984年4月	第39号	ヴォルテール『寛容論 ジャン・カラスの死に際して』
1984年7月	第40号	アーサー・ヤング『イングランド、ウェールズの南部諸州をめぐる6週間の旅』
1984年10月	第41号	スピノザ『神学政治論』
1985年1月	第42号	エルシュ=グルーバ『百科事典』
1985年4月	第43号	『康熙字典』
1985年7月	第44号	『四書集註』
1985年10月	第45号	ダンテ『俗語論』
1986年1月	第46号	『シャルル・ロンゲの書簡 1871年5月16日』
1986年4月	第47号	サヴァリー・デ・ブリュロン『通商大辞典』
1987年1月	第50号	アルノルドゥス・モンタヌス『日本図-東インド会社遣日使節紀行』
1990年7月	第64号	『資本論 ロシア語訳初版』
1991年7月	第68号	『ハリス百科事典』
1991年10月	第69号	ベンサム『パノプティコン』
1992年1月	第70号	ユークリッド『幾何学原本』
1992年4月	第71号	オールコック『大君の都』
1992年7月	第72号	シーボルト『日本』
1992年10月	第73号	ヒエロニムス・メルクリアリス『体育論』
1993年4月	第75号	“Illustrated London News”

ルソー、マルサスなどの著作、パリ・コミュニケーション関連からは『シャルル・ロンゲの書簡』、日本研究コレクションからシーボルトの『日本』などが取り上げられています。また、和漢書からは朱子学の『四書集註』『舜水先生文集』などがとりあげられ、いずれも著者とその作品に関連する時代背景や、その著作が後の社会にもたらした影響などが詳しく解説されています。

38回の連載のうち一度だけ図書館員による紹介があります。それは1494年刊行のルカ・パチョーリによる著作の紹介、1982年10月号の「実用書の祖：パチョリ『スムマ』・『簿記論』」です。本学貴重書コレクションの中でも最も重要な部類に入るこの貴重書の紹介は、当時の経済学部教授、吉田威先生による解説で、通常とは異なり全2ページ分を割いて掲載されています。ただし、この回でも2ページ目の後半に図書館員による解説を載せています。

80年代前半までの「図書館だより」誌上の貴重資料の紹介は1986年に刊行され、私立大学図書館協会賞を受賞した貴重書目録『古典逍遙』のベースになりました。情報も手軽に得られず関連資料を探すのにも苦勞したと思われる時代、38回の連載という形で残された図書館員の仕事は、ともしれば利用者サービスや施設の目新しさなどが話題の中心になりがちな現在の図書館に対して、ひとつの資料に真摯に向き合うという図書館員の原点を思い出させるのではないのでしょうか。

コラムニストの憂鬱

原 田 広

神奈川大学「図書館だより」が創刊 40 年を迎えるという。この 40 年という時間の起点となっている 70 年代初頭、大学進学率は 1965 年の 12.8% から、1970 年 17.1%、1975 年 26.7% へと急速な伸び（大衆化）を示し、大学紛争の沈静化とともに図書館利用者論が活発となる。これが本学などにおいても「図書館だより」発刊のひとつの背景であっただろう。その後、本図書館は旧館からの新築移転（1980 年）、トータルな電算化（1990 年）という全館的事業を乗り越え、さらに第二次ベビーブーマー対策的な拡張、大学全入時代を迎えて開始された FYS などの教育展開への対応をも要請されてきた。その推移が紙面にはかなり忠実に刻まれている。

通巻 138 号（プラス 18 号の試行的発行）を通覧し、ひとつの組織や人々が「時代とともにある」ことの困難さを、図書館という組織的営為の表層変化と本来的使命の基底的通奏との距離の遠さとともに痛感した。それぞれの時代を背負った特集記事の性格、執筆者の関心・力点の変化は、こうした刊行物において不可避の現象である。一方、その裏面あるいは基底に流れるある種の危機意識を示す短い連載記事が創刊以来、継承されていることがあらためて強く印象に刻まれた。編集責任者の「後書き（コラム）」である。

「この見事な建物（新図書館）に溺れない思想を学ばなくてははいけない。我々に与えられた使命は、とりもなおさず我々自身が課したものだから。」1980.11、「学生のみならず、金（きん）の時間を削っていつてくれたまえ。」1987.4、「時間は若い時にはありあまっているように見えて、気がついた時には足りないのが常である。（略）考えが涸渇しないためにも〈時の貧窮〉であってはならない。」1987.7、戦後図書館創設期から新館の建設・運営立ち上げに至る期間の中心的存在であり、自身「歷程」派詩人でもあった M 氏。

「道具としての情報機器の前提には学問の世界があり、図書館は情報媒体にいかような変化があろうとも基本的には学ぶ者としての行為に今昔はない。」1996.6、文字通り自らを削って資料収集を支援し 40 年の図書館人生をアドレセンス期そのままに全うした S 氏。

「売れる本、誰もが読む本を扱うことを目的とする本屋とは異なり、図書館の値打ちは、特に大学図書館が価値を持つのは何十年に一度のチャンスを潜在的に提供し得ることなのではないだろうか。」2001.7、洋書目録の世界標準化や貴重書目録 1986 につながる西欧古典籍解題の連載によって、80 年代の図書館水準を引き上げ牽引した T 氏（韜晦かとも思える自然詠を連載しつつ、そこに収まらない異例の危機感が同氏から何度か表明されている）。

「季節感と料理本」2009.9、「西洋中世の闇と現代都市」2009.12、「写本と現代人の筆力」2010.4、「知性を排除するデストピア」2012.7、などなど、成果報告症候群的の作文が蔓延するなか、意表を突く導入素材の選択と洒落な転換によって、一幅の絵画のような読み物とするコラムの冴えを示してきた E 氏。

紙幅の関係で引用できないその他のコラム子の書きぶりを含めて共通するものがある。内外の知的財産を収集保管する館の運営に携わっていることがもたらす羞恥に似た覚醒。図書館員がもっとも良き利用者であるはずという確信を届かせることの困難さゆえの焦燥。毎号を送り出す毎に一番最後に書かれるのであろう後書き（歴代部次長・編集委員 10 名を超える人々）の筆致を、図書館に課された難題への熱情と裏腹な憂鬱が彩色している。

こんなことを言うと、40 年の回顧としては邪道であると紙背から鋭く指摘されそうだが、巡り合わせで幸いに一度も後書きを担当したことがない筆者にも、コラム的〈違背〉の末尾に連なることをお許し願うとともに、関係者の不治の頭痛に同情と敬意が寄せられんことを。

非文字資料研究センター
元図書館情報サービス課長

図書館からのお知らせ

横浜・平塚共通

- ◎春季長期貸出期限日
2013年4月8日(月)
返却期限日までに必ず図書館に返却してください。
延滞すると延滞日数分(最長2週間)貸出停止になります。
- ◎図書館を利用する際は学生証が必要です。
入館ゲートを通るとき、図書を借りるときに学生証が必要です。
- ◎ガイダンス
横浜図書館では4月に図書館ツアー・OPAC利用ガイダンスを行います。また、6月には「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」についての映像セミナーを行います。奮ってご参加ください。
詳細は図書館ホームページや掲示をご覧ください。
- ◎盗難への注意
貴重品(財布、携帯等)は席を離れる時、必ず身につけてください。
- ◎マナーを守りましょう
下記の迷惑行為は止めましょう。
 - お喋り
 - ヘッドフォンの音漏れ
 - 携帯電話の使用(通話)
 - 指定場所以外でのパソコン、電卓の使用
 - 飲食
- ◎図書館では館内で利用できるノートパソコンの貸出も行っています。是非ご利用ください。

編集後記

本学図書館の貴重書庫には刊行されて数世紀を経た古い書物が並んでいる。本の外見である「装丁」には時代ごとに特徴があり、見慣れるとその書物が大体何世紀に作られたものか、背表紙だけでわかるようになる。中には本の中身とその装丁で明らかに時代が異なるものもあり、破損した表紙を修復する際にその時代のスタイルを採用してしまったのか、15世紀の書物に19世紀頃流行ったマープル模様の表紙をつけたものがある。それはそれで美しいけれど、なんだか威厳のある老人に流行りの服を着せたような感じがする。逆に19世紀の中身に数世紀前の重厚なスタイルの装丁をした本。中を開いて、若いのががんばってますね、と言いたくなる。

貴重書庫の本にはかなわないう「図書館だより」も長い時を経て40周年を迎えた。40年分通して見ると、一時期を除いてその外見がほとんど変わらないことがわかる。サイズは最初の二年を除いて同じ、デザインも数年前に表紙に写真が載りタイトルデザインが少し変わっただけのB5サイズの地味な小冊子であり続けている。

変化に対応しないものは消え行く運命だといわれる。だが、世の中に迎合して自らの姿をめまぐるしく変えた挙句、消えていったものは多い。図書館だよりの変わらないその外見は、図書館の歴史を一緒に生きてきたこの小冊子が、少々のことでは動じなかったことの証拠となるだろう。

本、雑誌、目録や検索システム、変化する時代を誰よりも早くから感じ取り、様々な電子化に対応してきた図書館が長い年月の間、途切れずにこの目立たない小冊子を発行し続けてきたことに敬意を表したい。

(N.E.)

今号の表紙

神奈川大学旧図書館

現在の6号館。1958年4月から1980年7月までこの建物が神奈川大学図書館であった。

神奈川大学創立50周年事業として1980年11月に現在の図書館(15号館)が開館した。